



親面接を読み解く視点抽出の試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤元, 早希, 張, 薫化, 宮田, りさ子, 山本, 恵里, 総田, 純次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005305

親面接を読み解く視点抽出の試み

藤元 早希, 張 薫化, 宮田りさ子
山本 恵里, 総田 純次

1. 問題と目的

心理療法的支援において、成人を対象とするものは個人面接の形態が取られることが多い。それは成人が多かれ少なかれそれまでの養育環境を取り入れて内面化している存在であり、既にある程度の自己を形成している為である。これに対してこどもは、親をはじめとする家族や学校、教師や友人といった環境とのアクチュアルな相互作用の中でまさに自己を形成する途上にある存在である。そのため、こどもへの心理療法的支援は、こども個人へのアプローチと同時に、親や学校といった環境に対する治療的関与が多様な形で実施されてきた。田畑・望月(1998)は、1987年から1996年の10年間に日本の主要な心理学専門雑誌13誌に発表された母子関係を扱った45の事例研究論文を展望している。それによると、乳幼児では同席面接ないし母親面接のみの形態、児童ではほとんどが並行面接の形態をとっていることが示されている。中・高校生の思春期事例では並行面接のほか、こども単独、母親単独面接の形態が多く、青年期ではほとんどがこども単独の面接であるが、親面接のみや同一治療者による面接も見られた。

こどもの治療における親面接の持つ機能や意味は多様なものがある。まず考えられるのは、こどもについての情報収集やこどもの支援のための環境整備という目的である。これは特に発達障害のこどもの場合などでは第一義的な機能になるかもしれないのである。

次に考えられるのが、アクチュアルな相互作用の只中にある親子関係を扱うという機能である。田畑(2000)は、先の展望論文で取り上げた45論文から代表的なものを内容的に分析し、共通の項目として①こどもの問題解決の過程で母親の問題が顕現してくること、②母子の分離・個体化が主な課題になること、③母子関係を越えた家族の歴史が問題になることもあるということを取り出し、さらに乳幼児期、学童期、思春期、青年期というこどもの年代別に母子に対する心理療法の特徴づけを行っている。田畑(1988)は、思春期不登校の女兒の母親単独面接の自験例の事例研究を通じ、①不登校にまつわる現実的問題への対処、②母親面接を通じての治療者のこどもへの間接的関与、

③母親のこどもへの関わりのスーパーヴィジョンの三つを母親面接の対こどもへの機能として挙げた。また、母親の問題の解決として、①母親自身の遷延された思春期の問題の解決、②母親の情緒的開発の促しを挙げている。大堀(2008)も、思春期のこどもの課題を自前の超自我を形成することと捉え、かつての親との対決というよりは現代では親との一体性からの離脱という形態を取るとしている。琴浦(2008)は、摂食障害の治療では母子を一組のクライアントとして捉え、親子それぞれの育ち直しの過程と支えることの重要性を指摘している。貞安(2014)と杉嶋(2014)は、親面接において生じる逆転移感情を利用した治療について論じている。杉嶋(2014)は、親面接において治療者が親であるクライアントに対して抱く違和感や葛藤を自覚・保持することで、クライアントに対する理解が進むのと並行して、親のこどもに対する理解が進展した事例を挙げ、治療者側の親に対するネガティブな感情の自覚と利用の意義を明らかにしている。貞安(2014)は、母親面接で治療者が逆転移感情を体験しながらも対処していくことで、親であるクライアントに適応的なモデル(new object)を提示し、投影同一化の過程を通じてクライアントの情緒を修正するという機能を果たしていると論じている。前田(2008)も虐待事例の支援に関し、こどもから投げ込まれる不快な感情を肯定的に受け止め、コンテインするための親の力を育成することが中心的課題であるとしている。

親面接の3つ目の機能として、母子を取り巻く夫、実家や夫の家族、学校といった環境との相互作用に対する介入を考えることが挙げられる。麻生(2016)は、子育て困難感を訴える母親との面接をシステムズ・アプローチの視点から検討し、面接経過の中で、クライアント個人の変化のみならず、母子関係の変化、夫婦関係の変化、親子間の境界の変化、社会的サポートとの関係の変化、といくつものシステムが相互連関的に影響しあい、最終的にクライアントの変化につながったと捉えている。これを踏まえて麻生は、地域の子育て支援における臨床心理士の役割として、①個人と家族のライフステージにわたった援助、②家族システムの見立てと介入、③支援ネットワークとのつながりを

維持する安全基地のような機能，④CIと支援チームに対するコンサルテーション，⑤CIのアドボケートの5つの役割の必要性を述べている。このようにシステムズ・アプローチの視点は，従来の親面接が母子関係ないしはせいぜい両親と子どもとの関係にのみ焦点を当てていたのに対し，それを取り巻く種々の社会的システムと連動して動くものと捉えているところが斬新であると言える。以上のように，子どもは，親や友人，学校など環境とのアクチュアルな相互作用の只中で自己を形成する途上にあり，親への支援は，合同面接，並行面接や親面接単独など，子どもの年齢層や事例の特性に合わせ，経験的に色々な形態が採用されていることがうかがえる。

以上，親面接や母子関係に焦点を当てた先行研究を展望し，母親面接が持つ多様な意味や機能を見てきた。親面接の機能として，①親の視点から子どもについての情報を収集し，子どもの問題を巡る現実的な対応を促すこと，②母子関係のアクチュアルな相互作用に焦点を当て，親の子どもへの関わりの変容のみならず，親自身に賦活されている心理的問題を並行して解決すること，③親子関係を取り巻く，家族や学校等の社会的環境との関係を含むより大きな諸システムの変容を促すことの重要性が指摘されている。子どもの治療を支えるために，複雑に重なりあい，混じり合う要素を読み解く視点と技術を持ちながら，面接の全体像を把握し，コーディネートしていく作業が親面接の担当者には求められることとなる。

しかし，個別の事例に於いて，こうした機能のどれがより前景にあるのか，あるいはこれらの機能がどのように相互に絡み合っているのか，さらに当該の事例のコンステレーションにふさわしい面接形態や面接方法は何か，親と子どもの面接は同時に導入する方

がよいのか，どちらかを先行させる方がよいのか，という視点は明確には取り上げてこれにくく，治療者の経験と直感に委ねられてきたのが現状であろう。こういった視点や技術は容易く手に入れられるものではなく，手に入れるためには多くの経験と学びが必要である。経験を十分意味のあるものにするためにも，こういった親面接の持つ複雑で独特な要素を概念化し，読み解く視点を得る方法が必要でないかと考えた。

本研究では，複雑な要素を内包する親面接の担当者が，事例の動きを読みとる助けとなる視点を見つけること，それを活用しやすい形にまとめることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

本学心理臨床センターに子どもの問題を主訴として来談し，子どもの遊戯療法と並行して継続実施している親面接を対象とした。

(2) 手続き・研究方法 (図1)

まず，本学心理臨床センターにて心理療法経験者10名程度からなるグループを作り，親面接担当者より面接過程をまとめた資料を提示し，それを基に各ケース1時間半程度の事例検討を行った。グループは臨床指導員2名～3名を中心に，院生，卒業生である研修生，本学に勤務する専門相談員をランダムに分類して作成した。その為，経験年数に幅があるグループとなった。本研究メンバーが司会の役割を担い，事例検討の目的を確認後，様々な立場から意見が出るようグループ全体に働きかけた。その際に，①親子関係の在り方や構造，またその変容の流れについて，②経過の中で変容のきっかけとなったと思われる時期（以下

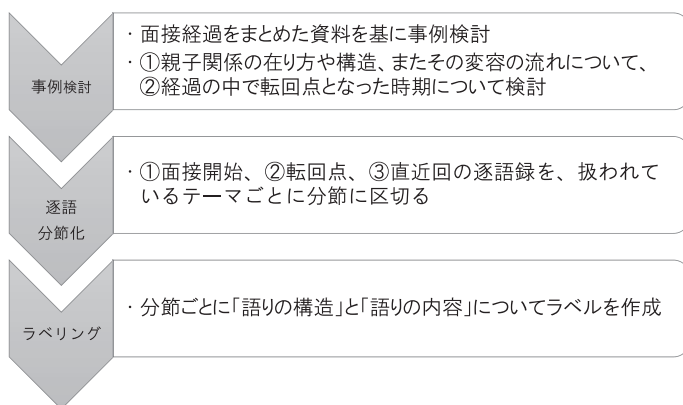


図1 研究手順

「転回点」と記述)はどこか、の二点を検討点として議論を行った。

次に、そこで挙げられた特徴や転回点の時期に着目し、本研究メンバーと親面接担当者でさらなる事例の読み込みを行った。具体的には、まず①面接開始時(基本的に初回)、②転回点(事例により変動)、③直近回(終結・中断ケースであれば最終回、継続中であれば事例検討発表時の直近の回)の三つの面接の逐語録の作成を親面接担当者に依頼した。その逐語録を基に、扱われているテーマごとに分節に区切り、「語りの構造」と「語りの内容」についてラベルを作成した。ここで言う「語りの構造」とは、その発言ややり取りが面接の流れの中でどう機能しているかを大まかに表したものである。「語りの構造」のラベル名の例として、「話題の転換」や「秘密の開示」が挙げられる。「話題の転換」の例として、「(ある事柄についてやり取りをしている文脈) そういえば、全く関係のないことなんですけど…」といったやりとりが挙げられる。「秘密の開示」の例としては、「今まであえて言えなかったことなんですけど…」 「誰にも言っていないんですけど…」といったやりとりが挙げられる。「語りの内容」とは、その分節内で示された内容を、現象に着目し概要を記述したものである。例として、「こどもと自分の重ね合わせ」や「こどもへの治療の関与」が挙げられる。前者は、こどもの特徴を述べ「これは私も同じ。とても似ていると思う」「私も同じようなことをしたことがある」等のやり取りを指す。後者は「今まで避けて

いたけど、専門的な病院の受診に付き添った」「特別支援の説明を聞きに行ってきた」などの行動や語りの変化のやり取りが例として挙げられる。

個別の事例検討を10ケースそれぞれに実施した後、分節をラベル名が近いもの同士で分類し、グループ分けを行った。グループの配置の特徴と時期ごとの変化を基に、ケースの特徴を表していると思われるテーマを抽出し、親面接を読み解く手がかりとしてカテゴリを作成した。10ケースそれぞれから作成したカテゴリを検証する為に、他のケースの事例検討に作成したカテゴリを用い、親面接の動きを説明しうるかどうかを検討した。その結果、9つのカテゴリを抽出するに至った。

加えて、事例の読み解きに際し、カテゴリをより視覚的に分かりやすく記入できるようなワークシート型を作成した(表2)。二次元で構成するにあたり、9つのカテゴリをグループに分け配置した。具体的には、言動や客観的事実から記入される次元のカテゴリ(表左)、親自身のパーソナリティや行動・思考パターンを担当者が見立てることで記入される次元のカテゴリ(表中央)、親面接とこども面接がそれぞれケースにどう機能しているかを見立てて記入する次元のカテゴリ(表右)と、次元ごとに三つに分類した。「こどもの問題に対する自分の位置づけ」というカテゴリは、以上の複数の次元を内包していると考え、独立したものととして最上部に位置付けた。

表1 カテゴリ一覧

	視点カテゴリ	
1	ニードの所在	セラピーのニードがどこにあるか。例) こどもを連れてきたいという養育者のニード、学校のニードなど
2	親の問題がこどもの問題として表現される	養育者の問題がこどもの問題として表現される。例) 養育者のファンタジーが子どもの問題に上乘せされ、こどもの問題として扱われるなど
3	こどもの問題に対する自分の位置づけ	こどもの呈する問題に対して養育者が自身をどのように位置づけるか。例) 自分の〇〇のせい、こどもの障害特性を自身と重ねる、支援者として関与するなど
4	こどもとの関係と他者(こどもとの関係における第三者性)	一見こどもとの二者関係のようにみえるが、そこにどのように第三者の価値観や評価、視点が入るか。もしくは入らないか。
5	こどもセラピーの機能	こども面接が親面接に与える影響、面接におけるこども面接の機能。
6	こどもの変化に対する反応	こども面接などで生じるこどもの変化に養育者がどのように反応するか。
7	親の内省力・客観性	養育者自身の内省力や客観性の程度。
8	親面接担当者の機能・役割	養育者面接担当者の機能・役割。
9	こどもの問題の変化	実際にこどもの呈する問題や様子の変化。

表2 ワークシート

③位置づけ			
子どもの呈する問題に対して養育者が自身をどのように位置づけるか			
<p>①ニード</p> <p>セラピーのニードがどこにあるか</p>	<p>②親の問題</p> <p>養育者の問題が子どもの問題として表現される</p>	<p>⑦親の内省力</p> <p>養育者自身の内省力や客観性の程度</p>	<p>⑧親面接</p> <p>養育者面接担当者の機能・役割</p>
<p>⑥子どもの変化への反応</p> <p>子ども面接などで生じる子どもの変化に養育者がどのように反応するか</p>	<p>④子どもとの関係と他者</p> <p>一見子どもとの二者関係のようにみえるが、そこにどのような第三者の価値観や評価、視点が入るか、もしくは入らないか</p>		<p>⑤子ども面接</p> <p>子ども面接が親面接に与える影響、面接における子ども面接の機能</p>
<p>⑨子どもの問題の変化</p> <p>実際に子どもの呈する問題や様子の变化</p>			

3. 結果・考察

(1) 研究方法について

本研究では、親面接が何から影響を受け、どのような機能を果たしているのか、そしてどのように展開していくのかについて個別の事例を読み解くと共に、共通する視点を探し、親面接の機能を外観する視点の抽出を試みた。個々の事例の詳細な読み解きが、普遍的な親面接の機能の説明を可能にし得るのではないかという考えの元に、個別の事例検討を行い、そこからカテゴリを抽出し、抽出されたカテゴリを使用して事例の再検討を行い、カテゴリを整理し、更に事例検討を行うという円環的な作業から成り立っている（図2）。カテゴリの精度は個別の事例検討と整理を繰り返す中で徐々に積み上がるものであると言える。そういった意味で、この研究方法自体が探索的な特徴を持つ、新たな試みであると言える。

個別の事例検討において、①初回、②転回点、③直近回の三点に着目した点も、本研究の特徴である。事例は経過があり、変化も少しずつ積み上がっていくものである。ただし、全てのやり取りを分節化し検討していくと視点が拡散していく危険性がある。そのため、事例の関係の変容が最も現れていると思われる「転回点」を出発点として、構造の在り方を見ることを試みた。「転回点」を軸に変容の流れを見る為に、転回点前（初回）と転回点后（直前回）の二点を追加

し、三点での事例検討を実施した。その結果、初回の検討は、事例の把握という点において有用であると感じた。その理由として、面接導入に至った経緯や外側の動き等の情報が多く得られたこと、転回点や直近回の検討を行う中で、初回で語られなかったこと、見えてこなかったことが遡って見えてくること、来談や諸手続にかかる親の現実的な処理対応能力や認知の在り方が見立てやすいことなどが挙げられる。ただし、引き継ぎケースの場合はどこを初回と設定するかという点は検討する必要があった。転回点は、親子関係の変

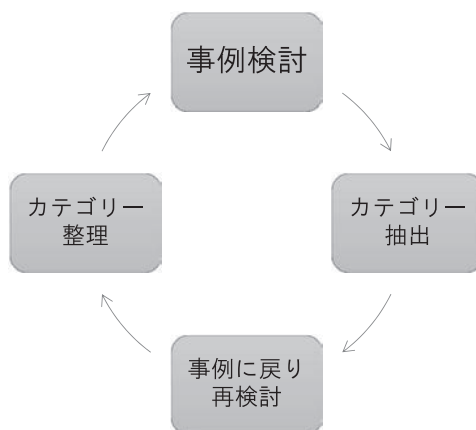


図2 研究方法の流れ

容のきっかけとなった点を、事例検討を通して設定した。例として、それまでこどものできなさや母親としての至らなさについて述べてきた母が夫や学校への不満について語り出した回といった、周囲との関係性の変容が表れるケースが挙げられる。また、Thを味方として子育てに非協力的な周囲を非難していた養育者が、Thの言動を自分を非難したと捉え、Thに攻撃を向けるようになった回がこどもの治療をめぐるシステムが変容したきっかけとして転回点に設定されたケースも見られた。直近回の検討は、事例が継続中なのか、終結しているのか、面接形態が変化したものなのか(個別面接が経過の中で電話連絡中心になった等)というように、事例によって差が出る結果となった。

(2) カテゴリについて

個別の事例検討を通して、親面接で扱われうる、もしくはテーマとして浮かび上がってくると思われる、親子関係を把握するために着目すべきと思われるカテゴリが抽出された。以下ではそれぞれのカテゴリの内容と着眼点について述べる。

「①ニーズの所在」とは、心理療法に対し誰が何を望んでいるかについて読むカテゴリである。申込票に主訴として記載されたり、親面接内で語られたり、非言語的に示されたりする内容を元に検討する。「所在」とあるように、ここではそのニーズが誰からもたらされているものなのかについても考慮する。来談への動きが、実際に面接に来た養育者からではなく、学校や病院、親戚などからの促しによって生じているケースも多い為である。また、実際に面接に来た養育者はそれをどう受け取ってどう動いているのかについても着目する必要がある。

「②親の問題がこどもの問題として表現される」とは、養育者の抱えている問題がこどもの呈する問題として表現されている可能性を読むカテゴリである。こどもは多かれ少なかれ養育者の影響を受けているものであるが、養育者の未整理な課題がこどもの問題として語られる事例は少なくない。養育者の課題の整理が成されることで、こどもの呈する問題についての養育者の視点が変化することがあるが、その変化はこのカテゴリの内容の変化として示されると言える。

「③こどもの問題に対する自分の位置づけ」とは、こどもが呈する問題について、養育者が自身をどのように位置づけているかを読むカテゴリである。こどもの発達障害という特性に対する位置づけを例に挙げると、養育者が自分と似ていると受け取っているか否か、自分の責任と捉えているか否か、好ましいものと

して見ているか否か、治療の関与者となっているか否かといった視点で読み解いていくことが可能である。親子関係における分化や密着が表れやすいカテゴリであると言える。

「④こどもとの関係と他者」とは、養育者とこどもとの関係の中に、もしくは養育者のこどもに対する評価の中に、他者の価値観や評価、視点がどのように入っているかを読むカテゴリである。例として、虐待関係にある養育者のこどもに対する評価を聞く中で、評価に強く影響を及ぼしているのは社会からの視線や評価や価値観であると読み取れる場合にはここに特記することができる。また、学校や医療機関からこどもの障碍について指摘されていても、養育者が盲目的に自身の評価を持ってそれらを退けている場合など、他者からの評価が極端に入り込まないという場合にもこのカテゴリで取り扱うことができる。

「⑤こどもセラピーの機能」とは、こども面接が親子平行面接においてどのように機能しているかという点を読むカテゴリである。例として、親子が密着している事例では、こども面接の導入自体が親子関係を分節する機能を果たすことがある。また、こどもの呈する問題に対して不安全感や介入できなさを感じている養育者にとって、こども面接の存在が安心感を与える機能を果たすこともある。疲労感の高い親子関係の場合、レスパイトの意味を持つこともあると思われる。初回の時点ではこういったこども面接導入という動き自体の意味合いが見られやすいが、面接が進むにつれて、こどものエンパワメントの側面が現れてきたり、こどもの表現や自立を促す側面が現れてきたりと、こども面接によるこどもの変化が親子平行面接に与える影響を見る意味合いが強くなる。経過の途中でこども面接が中断もしくは別の形態になる事例もあるが、そういった力動や動きもこのカテゴリで着目される点である。

「⑥こどもの変化に対する反応」とは、経過の中でこどもに生じる変化に対し、養育者がどう反応するかを読むカテゴリである。基本的には転回点、直近回において扱うこととなる。症状や主訴の消失もしくは増加、質や表現の変化に対し、養育者がそれをどう捉え、どう評価し、どう反応しているかについて読み解く視点である。

「⑦親の内省力」とは、養育者自身の内省力や客観性の程度を検討するカテゴリである。養育者自身が多様な情報をどの程度整理して捉えているか、自身の状態や感情についてどの程度開かれているのかという点に着目し見立てるものである。

「⑧親面接担当者の機能・役割」とは、親面接担当者がどういった役割を担うことになっているのか、それによって親子関係にどういった機能を果たしているのかについて読むカテゴリである。これは養育者がどういった役割を親面接担当者に望んでいるのかを考えることとも繋がる。養育者の主張の受容や支持の機能が強いこともあれば、超自我として機能することや、時として反発する対象として機能することもある。このカテゴリの内容の変化が、転回点の動きを引き出している事例も少なからず見られた。

「⑨こどもの問題の変化」とは、実際にこどもの呈している問題や様子がどのように変化したかを読むカテゴリである。客観的な情報で量ることも可能であるが、養育者が語るこどもの様子の変化が関係してくることになる為、結果的に養育者のこどもの捉え方の変化が表れうるカテゴリであるとも言える。

(3) ワークシート使用事例

作成したワークシートを使用した場合、どのように事例を表し得るのかについて、架空事例を元にした記入例を以下に示す。

【クライアント（以下、CIと略）】母親

【子（以下、Chと略）】小学生低学年男児

【事例概要：Chの学校での不適応を主訴に来談。Chに何か対処して欲しいという学校の訴えをきっかけに来談したが遅刻や陪席拒否もあり、来談に前向きではない様子が窺えたがCI自身の自覚は薄い。Chは言語表出が少なく、恣意的な言動が目立ったがCIからの働きかけはあまり見られない。同級生と言い合いになると言い返せずに手が出ることもあり、学校から対応を要求され、専門家にChへの対処を考えて欲しいというCIに、セラピスト（以下、Thと略）から状況の整理をしていく中でChへどういう支援ができるかを考えることを提案。CIは同意し親子並行面接を開始。経過の中で、学校から具体的な対処を求められることへの不満が語られ始める中で、そういう関わりをされると必要以上に距離を取ってしまうというCI自身の在り方への気付きが見られ始める。ThからChの発達検査を提案し、CIも同意。フィードバック（以下、FBと略）をする中で発達の特徴についてより具体的に見直す機会が得られた。Chはプレイセラピーの中で自由な表現が増え、学校でトラブルが起きたときにその経緯を説明することがあったというエピソードが語られるようになる（転回点）。CIは学校に心理検査結果を提出し、特別支援の利用を提案され、その利用方法について面接でThに相談するようになる。CI自身が

発達特性から過去に馴染めなかった経験を持つということも語られ始める。Thから、CIの未整理な部分を面接で扱っていくこともできると提案。CIも同意するが、その後電話連絡があり、Chの問題も落ち着いてきたからと面接の終了の希望を伝えられ終結となる。】

以上の架空事例の流れをワークシートを用いて整理したものを付表1, 2, 3に示す。本事例では、初回で見られたChの治療に対するCIの前向きでない様子が特徴的であり、何が作用しているのかをまず見立てる必要があった。カテゴリに記入する中で、CI自身の内省力や知的な問題を疑いつつ、学校とCIとの関係に着目する必要があることが窺えた。CIがChの発達特性を自分の遺伝だと捉えることで、それ以上の理解や関わりを避けているような状態であることも示唆された。転回点では、心理検査の実施とChの変化が契機となり、Chから遠ざかっていたCIを支援の中心部へ引き戻す動きが生じた。Chへの見方や関わり方が少しずつ変化する中で、CI自身が学校との関わりで負担を感じていたことや、それによってChから距離を取るようになっていたことに意識が向けられるようになった。Ch自身の在り方に目が向き始める中で、Chに重ねていたCI自身の傷つきが取り上げられることとなるが、それよりも現実的な対応の方に向かおうとするCIの動きや抵抗があり、面接は終結となったと考察できる。

以上は一例であるが、ワークシートを用いることにより、より多角的な視点から事例の流れを読むことができるのではないかと考える。

4. 総合考察

本研究では、こどもの心理療法的支援において重要な意味を持ち、それ故に複雑であり読み解きが難解な親面接について、支援者が事例を概観する際に役立てられる視点を得る為のワークシートの作成を試みた。その結果、親子関係の変容の流れを読み解く為の9つのカテゴリが得られた。本研究は、研究方法自体が試験的な意味合いを持つ為、取り出されたカテゴリの妥当性や事例の説明可能性については今後も慎重に検討していく必要がある。親面接をより深く理解し臨床支援を有用なものにしていく為には、視点の精度を高めていくこと、それを元とした事例検討の精度を高めていくことが求められる。個別の事例検討を重ね、カテゴリの整理を続けていくことが今後の課題である。

5. 参考文献

麻生典子 (2016). 多職種協働による地域の子育て支援における臨床心理士の役割. 心理臨床学研究, 34(4), 411-422.

琴浦志津 (2008). 摂食障害の心理治療から学ぶ子育て支援 松島恭子 (編) 臨床心理士の子育て支援—その理論と実践事例 岩堂美智子監修 創元社 pp.191-216.

小山智朗 (2009). 発達障害をかかえる子どもの母親面接. 「発達障害」と心理臨床, 360-36.

前田研史 (2008). 虐待と子育て支援 松島恭子 (編) 臨床心理士の子育て支援—その理論と実践事例 岩堂美智子監修 創元社 pp.134-152.

大堀彰子 (2008). 思春期の子どもの子育て支援 松島恭子 (編) 臨床心理士の子育て支援 —その理論と実践事例 岩堂美智子監修 創元社 pp.153-173.

貞安元 (2014). 青年期の心理療法における親面接実施をめぐる力動的相互交流 クライアントの“new object”体験に着目して. 心理臨床学研究, 32(1), 62-71.

関川紘司 (2005). ある不登校学生の母親面接—学生の再登校・そして就職活動. 学生相談研究, 25(3), 179-189.

杉嶋洋子 (2014). 母親面接事例から考察したセラピストに求められる自分自身への気づき. 心理臨床

学研究, 32(2), 172-181.

田畑洋子 (1988). 思春期登校拒否児の治療過程: 母親面接を通して. 名古屋女子大学紀要, 34, 195-204.

田畑洋子, 望月久乃 (1998). 事例研究法による母子関係の研究. 名古屋女子大学紀要, 44, 143-156

田畑洋子 (2000). 事例研究法による母子関係の研究 (2). 名古屋女子大学紀要, 46, 167-176.

高石浩一 (2010). 母親面接をめぐる覚え書き. 臨床心理学部研究報告, 2, 13-23.

高石恭子編 (2012). 子別れのための子育て. 甲南大学人間科学研究叢書 心の危機と臨床の知13. 平凡社.

(2019年1月31日受稿, 2019年2月13日受理)

付表1 事例(初回)

③位置づけ				
Chの発達特徴は自分の遺伝かもしれない。専門家に対処して欲しく、自分は積極的に関わりたい。学校が対応を求めてくることには疲労を感じている。				
<p>①ニード</p> <p>Chの発達特徴についてどうにか対処したい。自身が話したいことはない。(学校のChへの困り感のニードをそのまま持ち込む)</p>	<p>②親の問題</p> <p>情緒の抑制、葛藤の回避がうかがえる。</p>	<p>⑦親の内省力</p> <p>自身の葛藤や感情の動きが意識化されにくい。他者の評価と自身の意見との分化がされにくい。処理能力や知的な問題の可能性もあり。</p>	<p>⑧親面接</p> <p>学校とは別の専門家としてChの状態や問題について整理する。 CIが学校から求められている役割を共に担う協力者として機能。</p>	<p>※特記事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気になるから」と陪席拒否 ・道に迷い10分遅刻 ・申し込み票の主訴欄は空白 ・誤字が目立つ
<p>⑥こどもの変化への反応</p>	<p>④こどもとの関係と他者</p> <p>Chの発達特性は矯正されるべきという学校の視点に同一化している。</p>	<p>⑤こども面接</p> <p>学校から求められたことを遂行した。</p>		
<p>⑨こどもの問題の変化</p> <p>教室で暴れるなどトラブルが多くなぜそうなったのかの説明ができない、集団への指示を聞けない、学習の遅れ。</p>				

付表2 事例（転回点）

③位置づけ			
学校に促される形ではあるがChの心理検査の実施とFBを受けるなど支援の重要な役割を担う。Chの発達特徴について自身との違いを見つける。			
<p>①ニード</p> <p>Chの発達特徴についてどうにか対処したい。分かりやすく理解できる方法はないか。学校から求められている。 →Chへの心理検査を導入。</p> <p>⑥こどもの変化への反応</p> <p>Chの訴えを聞き、意外に色々と考えているのだなと意外に思う。 Chの心理検査結果のFBを通して、学習の躓きの理由について考える動きが見られる。</p> <p>⑨こどもの問題の変化</p> <p>学校のトラブルについて、CIに理由や経緯を説明する動きが見られる。</p>	<p>②親の問題</p> <p>他者から責められていると感じると関係を閉じてしまう在り方について意識を馳せる。</p> <p>④こどもとの関係と他者</p> <p>Chの発達特徴について学校とは別の視点を持ち始める。学校への不満やネガティブな思いが意識化され始める。</p>	<p>⑦親の内省力</p> <p>自身の葛藤や感情の動きが意識化されにくい。処理能力や知的な問題の可能性もあり。</p>	<p>⑧親面接</p> <p>学校へのネガティブな思いに共感する協力者として機能。発達検査実施によりChの治療へのCIの関与を強める。CIが自身の在り方を見直す動きを促進。</p> <p>⑤こども面接</p> <p>ChとCIの分離を支える。Chのエンパワメント。Chが自身を表現することの抵抗を減らす。</p>

付表3 事例（直近回）

③位置づけ			
Chの特別支援の体制を学校とやり取りして整えるなど、Chへの支援に関与する動きが見られる。			
<p>①ニード</p> <p>Chの支援について具体的な方法を相談したい。 Chの変化に伴いCI自身の過去の傷つきなどが出てきたが、深く扱うのは避けたい。</p> <p>⑥こどもの変化への反応</p> <p>トラブルがあった際に、Chの言い分を聞くようとする動きが定着してくる。</p> <p>⑨こどもの問題の変化</p> <p>特別支援の導入によって学習の困難は軽減。トラブルは変わらずあるが、自身の言い分を主張する動きが以前より見られる。</p>	<p>②親の問題</p> <p>CI自身も発達特性から環境に馴染めなかったという傷つきがあったことに思いを巡らせる。</p> <p>④こどもとの関係と他者</p> <p>Chの発達特徴について自身の見立てを持ち始める。学校とうまくやり取りができる距離感を探り始める。</p>	<p>⑦親の内省力</p> <p>自身の葛藤や感情の動きが少しずつ意識化され出す。そこに深く触れたくはないという抵抗が働いている。</p>	<p>⑧親面接</p> <p>CIが自身の在り方を見直す動きを促進するが、抵抗も引き起こす。具体的な支援の選択肢について情報提供。</p> <p>⑤こども面接</p> <p>Chを個として扱う土台をつくる。Chのエンパワメント。Chが自身を表現することの抵抗を減らす。</p>